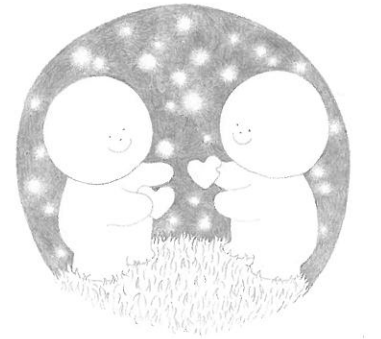


# 自閉スペクトラム症児者の心の理解



## ●人とうまく関わるいじょうができません。

「なぜ人とうまく関わるできないのか?」。自閉スペクトラム症児者と関わるときに、多くの人が感じる悩みや疑問の一つです。視線を合わせてくれない、誘っても集団に入ろうとしない、すぐ怒って周りの人とトラブルになってしまう。:。「人とうまく関わるできません」といわれる中身は多様です。

一方、この「人と関わるできない」状態は変わらないものではありません。周りの働きかけのなかで変化し発達していきます。

シン君は、就学前通園施設に通う4歳の男子。先生がいろんな遊びをためすと、身体の揺れはとても喜ぶことがわかりました。それから先生は、通園バスを下りた直後の1時間、毎日ブランコ遊びを続けました。ブランコを押してもらい大きな揺れになるとキャッキョッと声をあげて笑います。しかしその笑顔は、ブランコが終わった瞬間に消えてしまいます。そしてブランコを押してくれた先生の足を踏んでしまっても、その足を見ることもなく走り去ります。

障害をもたない子であれば、楽しい活動は、それをやってくれた人への関心や笑顔などポジティブな感情を強めます。ところが、シン君の場合、楽しい活動とそれをやってくれた人への関心が結びつかないのです。これは、人とうまく関わるできないといわれる自閉スペクトラム症児者の特徴の一つです。

## ●楽しい活動が続けられない。期待と要求

しかし興味深いことに、本人に笑顔がみられる楽しい活動をしていねいに一定期間続けると、多くの自閉スペクトラム症児者に変化がみられます。その一つは、その活

## 第2回 一緒に笑いあえる「人」の存在に気づく

### 別府 哲 (岐阜大学)



べつが さとし/岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活ー共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』(以上、全障研出版部)など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。

動への期待が生まれることです。通園バスから下りる切り替えに時間がかかっていたシン君。しかしある時期から、バスを自らすつと下り一目散にブランコへ走っていくようになりました。自閉スペクトラム症児者が比較的好意である、決まった流れのなかで繰り返すことによる見通しの形成(通園バスを降りると次はブランコ)が楽しい活動に結びついたことで、見通しが「期待」に変わったのだと思います。

見通しが「期待」に変わると、楽しい活動を「もつと」やりたいという要求が強まります。いつもならブランコが終わった瞬間にその場から走り去るシン君がある日、ブランコから立ち上がろうとしませんでした。彼はそこで突然「ア! ア!」と言い、後ろにいた先生の手を引っ張ったのです。先生は、「もつとやってほしい」という彼の要求だと思い、本当にうれしかったと話されました。

## ●「人」の発見

それまでシン君は、活動(ブランコ)と楽しさ(快の情動)をただ結びつけるだけだったのでしよう。しかしこの瞬間、その両者をつなぐ「人」という存在に初めて気づいたのだと思います。ブランコに座れば自動的に揺られて楽しくなるのではなく、ブランコを揺らしてくれる「人」(ここでは先生)がいることへの気づきです。先生のうれしさの背景には、シン君が初めて自分を「人」として意識してくれた! という喜びがあったと思われるのです。

このことは、自閉スペクトラム症児者がなぜ「人とうまく関わるできない」のか、そしてそれが変わっていく際になにが大切なのかを考える際に、とても重要な視点を提供してくれます。

障害のない子どもは、生後数時間後から、大人の表情